

日本国内でも活躍する修了生



大原 育子 [修了生]
会社員（救急安心電話相談員）

私は日々の実践現場で感じる疑問に答えが欲しくて入学しました。社会は目覚ましくAIが進歩し、人々の身近な相談相手になっていますが、対人による情報提供の需要は高いままです。今まで看護学の視点だけで世の中を見てきた私ですが、本研究科で様々なテキスト科目から学びを深め、相談者への向き合い方に深みが増しました。院生仲間との対話にコミュニケーション能力を鍛えられ、正解ではなく成解に行き着くプロセスが、何よりも自分自身の貴重な開発になったと振り返ります。電話の向こうに広がる世界は無限です。自身の想像を超える社会問題や人々の多様な生き方に答えが1つでないことを痛感しながら、AIに代われないものは何かと卒業した今も探究心が尽きません。人とつながる支援の面白さを残してくれた本研究科に心から感謝しています。



岩塚 善哉 [修了生]
小学校教諭

現在、小学校において、通級指導教室担当として勤務し、通常学級の困り感がある児童の支援をしています。また、特別支援教育コーディネーターも務め、校内外における連絡調整や保護者との関係調整をしています。
修士課程は、JICA 青年海外協力隊と同時並行で2年間履修しました。協力隊はナミビアへ配属され、事例をもとに改善点を見だしていく「事例検討会」をナミビアで実施し、修士論文は、事例検討が教員の指導方法に及ぼす影響についてまとめました。
現在の勤務先において、研究した事例検討を応用することがあり、様々な視点や角度から、物事を考えることができるようになりました。
そして、学生同士でSNSや大学院の掲示板で進捗状況を確認し意見を交換したことで、それまで関わることのなかった人とのつながりもでき、海外にいながら学べたことは、大変有意義なものとなりました。



高野 勝郎 [修了生]
国際協力機構
ガバナンス・平和構築部

JICA 海外協力隊（環境教育）としてフィジー共和国で活動したことをきっかけに、同国の先住民とインド系移民の対立・多文化共生に関心を持ちました。論文執筆過程では、漠然とした疑問レベルだった初発の問いを磨き上げてリサーチクエスションを設定し、それを明らかにするための論理的なストラクチャーを組み上げていきます。私は昨年度までJICA国内センターにおいて研修員受入れ事業や国内における多文化共生事業を担当していましたが（2025年度本部へ異動）、プロジェクトや企画を立ち上げる時に、どのように問いを立ててスコープを定めるか、それに対してどのようにアプローチし、まとめていくかなど、修士課程で学んだ思考方法が大いに役立っていると感じています。本研究科において、研究内容はもとより、先行研究の読み方、論理的な思考プロセス・文章力など、社会開発に携わる人間として重要な力を得られたと思っています。



武井 真由美 [修了生]
社会福祉士・児童指導員

現在、児童養護施設で、家庭的養護が必要な児童をサポートする仕事をしています。短期大学卒業後、障害児福祉に従事しJICA海外協力隊（養護）としてモンゴルで活動しました。帰国後も国際協力関連のNGOなどに携わりましたが、目まぐるしく変化する日本の福祉制度への理解を深めるなかで、再び日本での障害福祉や児童福祉の実践現場に関心を抱くようになりました。大学への3年次編入と社会福祉士の国家試験への挑戦を並行して進め、そうした実践の中で研究や理論を体系的に学びたいと考えるようになり、修士課程への入学を決めました。本研究科では、研究者、実践者、支援者など自分のポジショナリティに自覚的になる機会が多かったです。周囲の出来事や他者をどのような立場や視点から捉えているのかを問い直し、自分自身を相対化して捉える視点は現在の仕事にも活かされています。



和田 さとみ [修了生]
岐阜県公立高校教員

2015年、当時勤務していた公立高校でフィリピンにルーツをもつダイレクト生（渡日後、日本の中学校を経ず、直接高校を受験する生徒）を担当したことが外国につながる生徒に関心を寄せるきっかけとなり、その後JICA 海外協力隊員として、スリランカで環境教育活動に従事しました。本研究科では、多様な分野で活動する同期や個性豊かな先生方から刺激を受ける中で、自分自身の「思い込み」に気づき、物事を多面的に捉える力を養うことができました。現在は、外国につながる生徒が全校生徒の半数を超える岐阜県内の公立高校で校内外の業務調整及び、高校生のための日本語指導の在り方を日々、検討・実践しながら日本語教育に従事していますが、現在の仕事にも、本研究科で身につけた開発学の知識や視点が大いに生きています。



渡部 晃三 [修了生]
国際教養大学 URA・教員

修士課程在学中、「先行研究から学ぶ」、「複数の視点で客観的に対象を見る」、「研究の問いを磨く」ことの研究における重要性や論文作成の基礎を丁寧に指導いただきました。先生方や在学生とのテキスト科目やスクーリングでの意見交換から新しい視点が得られ、それは前職でブータンやケニアなどの国際協力の現場で応用することができました。現在は、活動場所が日本の大学に移り、所属先の大学が複数の大学と連携して進める森林の価値の変換を通じた自律した豊かさの拠点形成をテーマとする研究事業に関わっています。大学院で気付かされた、「開発に関わる問題は外国だけでなく日本にもあり、開発の視点でこれからの日本の社会のあり方を考える大切さ」について、日本をフィールドとして取組みたいと思っています。



大橋 充人 [修了生]
国際交流協会職員
元、愛知県職員

愛知県庁で様々な仕事に従事する中、多文化共生の仕事に携わることになり、日本で暮らすムスリムのことを知りました。大学時代にアラビア語を勉強したこともあり、彼らに強い関心を抱いたのですが、仕事として深く知ることは難しいだろうと思っていました。そのうちに、ひょんなことから、本研究科のことを知り、ここで彼らのことを研究しようと思いつきました。最初は、国際開発の経験がなく、不安でしたが、これまで取り組んできた仕事は、愛知県をフィールドとした社会開発なのだと気づき、改めて、これまでの仕事を開発の視点から振り返ることができました。また、それ以外にも多くの知識を得、ものの見方を学ぶことができました。偶然入った本研究科ですが、現場目線で実践的な考え方が重視されることが肌に合い、同期の人たちとも気が合って、充実した2年間を送らせていただき、感謝しています。

※掲載者の所属などは、2026年6月現在のものです。

在籍者情報・グラフ（2026年4月現在）

